加藤健一事務所 ドレッサー

言わせて！今日の芝居

五十字劇評 No.46

【五〇代】

▼ドレッサーと座長、どちらが主役なのか？どちらも主役の風格がありました。ただ加藤さんに思い入れがあり、加藤さんのノーマンも観てみたいと思ってしまいました。（女性）

【六〇代】

▼もう駄目だという状況の中でも芝居は続いていたことに、改めて演劇の力を感じた。#市民劇場すごい!!（女性）

▼爆音の中、芝居の幕を開けるため、最後の力を注ぐ座長。客の声援に応えるためか、劇団員のためか？戦争中という時代背景が現代の情況にも通じて、演劇をしている人々の苦悩を表していると感じました。（女性）

▼演劇に対する限りないリスペクトを感じさせてくれる、重厚な内容の演劇で見応えがあった。この時期に観られてよかった。ただ、加藤健一さんの存在感の大きさが、お芝居のバランスを少し崩していたように感じた。他の役者さんも力量をそなえた方だっただけに少しだけ残念・・・。加藤さんのドレッサーを観てみたいという叶わぬ思いが心に湧いてきた。（男性）

▼史劇の舞台裏という設定や、座長の台詞忘れ場面は面白かった。戦時下で芝居をうつ苦悩が伝われば良かったが。（男性）

▼芝居。役者。人生とは。真面目で紳士な演劇人筆頭のカトケンさん。今とリンクし過ぎの熱演。共演者にも拍手。（女性）

▼今回は、芝居の中に別の芝居（『リア王』）の舞台裏が組み込まれている面白さがあった。演劇人にとっては、堪らない芝居だと思う。いろいろな思いを感じさせてくれる、奥行きのある懐の深い作品だ。座長だけではなく、出演者各人の様々な思いが浮き彫りになるところが興味深い。「悩みを抱えて苦しんでいるのは、座長あなただけではない。」というノーマンのせりふが印象的。出演者の皆達者な演技が素晴らしい。特に、加藤さん、加納さん、一柳さんが良かった。以前は加藤さんがノーマン役を演じたとか。ノーマン役の加藤さんはどんなだろう。（男性）

▼座長にとって、ノーマンは居て当り前、あまりにも当り前の存在だったのだろう。自分の存在が認められていないのは一番辛い。空襲に怯えながらの舞台は、

まさしくコロナ禍という有事に直結する。出演者たちの切実感と緊迫感をひしひしと感じる舞台だった。ありがとう！　（男性）

【七〇代】

▼第二次大戦中のイギリス。爆撃音の聞こえる中、いつ芝居ができなくなるか分からない。座長は自分自身の限界も感じていたから、追いつめられ、どうしていいのか分からなくなっていた。パニック状態の座長を、最後まで舞台に立たせたのは、付き人のノーマンだった。座長は手帳に多くの人へのメッセージを書きのこした。なんとか舞台を演り終えて座長はノーマンに手帳に書いたことを読んでもらいながら息をひきとった。ノーマンは、手帳の中に自分へのことばがないのは信じがたかったにちがいない。ノーマンの傷心する姿は、すごく切ない。なぐさめてあげたくなった。「ノーマンどうなるの？」でも、私は、こうも思った。座長にとって、ノーマンは、自分の分身だったのだと。いつもいつも座長のそばにいたノーマンは、座長のことばを聞いていただろう。怒りも嘆きも、つぶやきの中にあるたくさんの感情を。座長は、自分がいなくなったら、これからノーマンはどうする？と問いかけていたのだ。「私には、ノーマンがいたけれども、ノーマンには、私のそばで支えつづけたノーマンはいないのだよ。」いろいろ考えさせられました。加藤健一さんのノーマン役を観てみたいと思いました。　（女性）

▼コロナ時代とも言える、この状況下と重なる舞台でした。座長以外のキャストの台詞が聞きとれず残念！しかしカーテンコールの加藤健一のメッセージに心熱くなりました。　（女性）

▼ドレッサー（付き人）ですからノーマン（加納幸和）が主役だと思っていましたが、座長役の加藤健一さんが舞台に出てくるとあれ加藤さんが主役かと思うほど、貫禄でしょうか？加納さんのセリフが聞きにくいところがかなりあり残念でした。劇中劇楽しみにしていたので、もう少し見たかったです。　（女性）

【年代不明】

▼カトケンさんの熱い思いが伝わってきました。でも他の人が打ち消されてしまった。座長の街中での奇行ぶりをセリフ説明でなく、芝居でみたかった。

編集スタッフから

会員のみなさん、今日のお芝居いかがでしたか。役者の息づかいを感じ、劇場全体が一体となり、興奮があり、生の舞台を感じましたか。感想をぜひ投稿して下さい。お待ちしています。そして、観るだけでなく、俳優や裏方と交流できる市民劇場の良さを、体感出来る日が早く戻るのを待ちましょう。